

JAIR NEWSLETTER

日本国際政治学会

No. 30

January 1985

理事長就任の辞にかえて

永井 陽之助 (東京工業大学)

今般はからずも川田侃理事長のあとをうけ、学会理事長に選出されましたことは、身にあまる光栄と存じます。特に本学会創立30周年を2年後にひかえ、その責任の重大さに身の縮むおもいがいたしております。すでに細谷千博委員長を中心に記念事業の計画・準備が着々とすすんでおりますが、その計画や組織の詳細につきましては、あらためて会員の皆さまにお伝えする予定であります。会員諸兄・諸姉の積極的な御参加と御支援なしには成功のおぼつかない大事業と存じます。この機会をかりて皆さまの御協力を切にお願いするしだいです。

私も昨年9月で還暦をむかえ、昭和史とともに歩んだ60年の人生をふりかえり、いささか感無量なものがありません。ともかく今日までよく生きてこれたものという実感がまずあります。第一次世界大戦とロシア革命に開幕した20世紀は、文字通り、戦争と革命にあけくれた世紀でありました。やがて次の世代が、20世紀の歴史をふりかえったとき、どういうイメージをもってこれを描くかに興味があります。おそらく、20世紀に生をうけた人たちは、この野蛮と非文明、大量殺戮の時代を、どうやって生きぬいてきたのか、きつといふかしがるにちがいありません。先日、ある若い後輩の一人に、「先生方の年代で、いままで生き残っているのは、よほど悪運のつよい人たちでしょうね」といわれて苦笑させられました。

この「愚行の葬列」(バーバラ・タックマン)ともいふべき20世紀が、同時に、アインシュタインの相対性理論や量子力学ではじまった科学革命の時代でもあったという事実を忘れてはならないとおもいます。ジョン・アダムズがなげいたように、どうして経済や政治の世界では「三、四千年の昔にくらべても、ほとんど進歩のあとが見られない」のでありましょうか？要するに、人間とは「技術をもったサル」にすぎないのではないのでしょうか。私の好きな映画に、スタンレー・キューブリック監督の『宇宙の旅・2001年』があります。われわれの先祖の原始人が手にしてふりあげるコン棒が空中にまい上って、宇宙船になるという、すばらしいシーンがありました。「武

器をもったサル」こそ、われわれの現代人の本質なのではないでしょうか。

政治学の講義の冒頭、これまでは「政治は人類の歴史とともに古い」とやっていたのですが、近ごろは、「政治はサルの歴史と共に古い」といわざるをえなくなりました。動物行動学や社会生物学の発達で、「サルも政治する」ことが常識となってきたからであります。権力闘争、すみ分け、縄張り争い、ボス支配、権力や威信のハイエラキー、権力と性の独占と配分関係、ほとんどサルの生態と人間の生態とは本質的にかわりがなく、パワ・ポリティックスは、サルからうけついで一種の遺伝情報かと疑いたくなるほどです。

だが、人間はサルよりも始末がわるく、ゆたかなイメージネーションを持っていて、そのヴィジョンを実現する力と手段を手に入れたと信じてむよになっています。橋をかけ、建物をたてるときなら、青写真やモデルに合わない邪魔な障害物は、ダイナマイトで破壊、改造できます。この種の工学的アプローチを人間を相手にも適用可能と信じはじめたところに、20世紀の非文明と野蛮がはじまったのではないのでしょうか。

昨年秋の大会でギルピン教授をまねいて南北問題を討論したさい、私はジョージ・ケナンの語をかりて、われわれのアプローチは、^{メカニク}機械工ではなくて、^{ガードナー}庭師の手法でなければならないと述べました。いま「米国の新フロンティア」として脚光をあびつつある環太平洋地域の将来についても、おなじことがいえます。環太平洋地域構想といったグラウンド・デザインではなく、あらたな機会を求めて移動・交換・集積していく無数の自然のなりゆきにたいして、水をやり虫をとり、縄わたしをしていく庭師的手法にこそ、実のりある成果を約束する秘密があると信じております。

1985年春季研究大会

5月18日(土)、19日(日) 於拓殖大学

学会組織図 (1984. 11～1986. 10)

理事長
永井陽之助

副理事長
平井友義

運営委員会

学会運営の全般に関する審議

永井陽之助(主)・平井友義(副)・宇野重昭(理事長補佐)・細谷千博・谷川榮彦・川田侃
・有賀貞・大畑篤四郎・木戸森・中嶋嶺雄・松本三郎・百瀬宏

30周年記念事業実行委員会

委員長 永井陽之助

企画・研究委員会

全国的な会員間研究組織の統括・推進など

川田侃(主)・松本三郎(副)

研究分科会

日本外交史〔大畑篤四郎〕、東アジア国際政治史〔宇野重昭〕、ヨーロッパ国際政治史〔百瀬宏〕、東アジア〔中嶋嶺雄〕、ソ連・東欧〔林忠行〕、東南アジア〔小沼新〕、アフリカ〔小田英郎〕、中近東〔浦野起央・丸山直起〕、アメリカ政治・外交〔有賀貞〕、国際統合〔中原喜一郎〕、トランス・ナショナル〔石川一雄〕、国際政治経済〔山本満〕、政策決定〔渡辺昭夫〕、システム・リンケージ〔織完〕、安全保障〔佐藤栄一〕、数量政治〔山本吉宣〕、平和研究〔高柳先男〕、ラテン・アメリカ〔松下洋〕、国際交流〔杉山恭〕

日本学術会議連絡委員会

谷川榮彦(主)・百瀬宏(副)

編集委員会

機関誌の企画・編集および発行

木戸森(主)・黒柳米司(副)・木村修三・原口邦紘・山本武彦・岡部達味・猪口孝・伊東孝之

書評小委員会

黒柳米司(主)・波多野澄雄・植田隆子・菅英輝・志鳥学修・豊下梢彦・グレン・D・フック・猪口邦子

ニューズレター委員会

ニューズレターの企画・編集および発行

中嶋嶺雄(主)・毛里和子(副)

対外交流委員会

ISA・BISA、その他海外の学会との交流の推進・国際会議の企画など
細谷千博(主)

機関誌英文版刊行小委員会

交換論文審査小委員会

会計部 (早稲田大学事務室)

予算・決算の作成、会費関係等会計業務全般に関する統括
大畑篤四郎(主)

事務局

研究大会開催に関する業務、関係官庁との連絡業務、機関誌、ニューズレター、アンケート等の発送業務、ISA・BISAその他の対外交流関係業務、維持会員関係業務、会計部との連絡、各種問い合わせの処理その他
(津田塾大学事務室)

百瀬宏(主)・林哲(副)・宮崎英隆(副)

一橋大学事務室

有賀貞(主)・高松佳代子

東京工業大学事務室

土屋裕美

学会活動報告

(1984年 8月～11月)

- 8月20日 評議員名簿確定(336名)につき、理事および監事の互選を依頼(9月19日締め切り)
- 9月24日 理事・監事選挙管理委員会開催、次期理事35名・監事3名選出
- 9月29日 日本学術会議に登録申請
- 10月26日 運営委員会・理事会開催
- 10月27～28日 秋季研究大会開催(於日本大学)
大会出席者約400名(27日に総会、懇親会)
- 10月27日 新理事による理事会開催、理事長に永井陽之助氏(東京工業大学教授)、副理事長に平井友義氏(大阪市立大学教授)を選出
- 10月27日 機関誌『国際政治』第77号(昭和59年度第2号)「国際統合の研究」および第78号(昭和59年度第3号)「東アジアの新しい国際環境」の発行、配布
- 10月27日 書評小委員会の開催
- 10月28日 運営委員会開催
- 10月28日 編集委員会開催
- 11月9日 日本学術会議より登録確定の通知

編集委員会だより

編集副主任・黒柳米司(日本国際問題研究所)

10月27～28日、日本大学で開催された秋季研究大会に際し、機関誌『国際政治』第77号「国際統合の研究」(鴨武彦会員担当)、および第78号「東アジアの新しい国際環境」(中嶋嶺雄会員担当)の2号をお届けしました。

次の刊行予定は原口邦紘会員担当の第79号「日加関係の史的展開」ですが、この号から機関誌の刊行時期が各年度5月、9月、1月に変更されることとなりましたので、第79号の刊行は1985年5月の予定です。

研究分科会の近況

日本外交史分科会

大畑 篤四郎(早稲田大学)

最近における日本外交史研究分科会の活動状況は下記の通りである。

5月27日

西尾林太郎(早稲田大学)「福原芳山と条約改正交渉—明治初年における旧領主のロンドンでの留学体験—」

赤木莞爾(防衛庁防衛研修所戦史部)「昭和20年の仏印処理をめぐる外交と軍事」

(以上は春季研究大会の分科会大会における報告)

7月7日

藤井昇三(電気通信大学)「1926年の大沽事件について」
10月20日

林明德(台湾師範大学)「台湾における外交史研究史料について」(東アジア国際政治史部会との合同研究会)

なおさきに報告した4月7日の青山墓地散策の会については、案内役の栗原健氏が詳細に紹介されているので、ご参照を願いたい(同氏「青山霊園案内記」日本歴史1984年9月号)。

12月の研究会は未定であるが、明年1月には横浜開港資料館を訪問することを考慮中です。たまたま「外国商館と横浜」展開催中ですので、その見学と併せて会合を開くことを考えていますが、横浜まで出向かなければなりません。その点如何かと思っていますが、関心のある方は大畑までご一報いただければ、それらの意見を考慮して検討したいと思います。

東アジア国際政治史分科会

藤井 昇三(電気通信大学)

本分科会の最近の活動状況は次の通りです。

1984年10月20日 林明德(台湾師範大学)「台湾における外交史研究史料について」(日本外交史分科会との合同研究会)

10月28日 山田辰雄(慶応義塾大学)「最近のソ連における中国研究」

本分科会所属の民国史研究会の活動状況については

10月23日 林明德「満州事変に対する中国の対応——不抵抗主義を中心として——」(慶応大学の東アジア研究会との合同研究会)

研究会開催の通知を御希望の方および報告御希望の方は、下記へ葉書または電話でお申し込み下さい。

藤井昇三

横山宏章

東南アジア分科会

西原 正・小沼 新

東南アジア分科会では、山影進氏(東大教養学部助教

授)による「日本とアセアン関係は緊密になってきたか」と題する興味ある発表があり、その後活発な討論が行われた。山影氏は、1977年の福田首相のアセアン訪問以後日本とアセアンの関係が緊密になってきたという一般的見解に対して、援助、貿易、投資などの経済的指標をもとに再検査してみると、実際には緊密度がすすんだ証拠はあまりないとの見解を紹介した。これに対して、他の指標(政策姿勢の変化など)をとれば緊密化がみられるのではないかとする意見がいくつか出、日本側に立つかアセアン側に立つかの視点のとり方、方法論などをめぐって議論が続き、きわめて有意義な研究会となった。今後も東南アジアの政治、外交史、国際関係など各種のテーマと逐次取り組み、学界に貢献していきたい。

中東分科会

丸山 直起 (国際大学)

当分科会は5月神戸大学で開催された春季大会の際、アフリカ分科会との合同研究会を行ない、権田潤「リビア外交とチャド紛争」、井上一明「ジンバブウェにおける連立政権の成立とその挫折」の各報告がなされた。中東と他地域とのかかわりは、こんにち、ますます深くなっている、今後ともこの種の合同研究会を催すなどして活動の輪を広げて行きたい。

このほか、次のような活動が行われた。

6月29日岡倉徹志「イラン・イラク戦争と湾岸諸国」
10月28日伊能武次「1970年代のアラブ地域政治の展開」
(秋季大会分科会報告)

国際交流分科会

杉山 恭 (青山学院大学)

当分科会は、1984年度後期は下記の研究会を開催しました。

第14回研究会

9月27日 関寛治(東京大学)「体験的文化交流論—理論と現実を考える」 青山学院大学間島記念館第10会議室

第15回研究会

10月28日 行実緑(頌栄女子学院)「短期海外旅行による外国人イメージの変化—SD、社会的距離尺度、TH I、R—Fスタディーによる調査の試み」日本大学法学部 334 教室

第16回研究会

11月22日 吉田重信(総合研究開発機構)「国際研

究交流の実際—日本に期待される役割」 青山学院大学間島記念館第10会議室

第17回研究会

12月13日 小宮山隆(国際交流基金)「日中文化交流の現状と問題点」 青山学院大学間島記念館第10会議室

安全保障分科会

佐藤 栄一 (新島学園女子短大)

秋季大会では、以下のテーマで御報告いただき、活発な討論を行なった。

「アメリカ議会と戦争権限 —ヴェトナム人道援助・撤退法案審議に見るその復権の限界—」

報告者・木村卓司会員

ディスカッサント・宮脇岑生会員

「米国市民運動と核軍備管理交渉」

報告者・北川智恵子会員

ディスカッサント・佐藤栄一会員

当分科会発足以来、報告者は関東地区在住会員に偏ってきた傾向があるので、今後、少なくとも学会開催日には関東地区以外の会員からの御報告を頂きたいと思っている。報告御希望の方は、佐藤栄一(03-921-2263)まで御連絡いただければ幸いである。

大学紹介

摂南大学国際言語文化学部

倉沢 愛子

摂南大学は、大阪工業大学の姉妹校として、1975年に大阪府下寝屋川市に設立された新設校である。当初は工学部だけの単科大学としてスタートしたが、現在は、国際言語文化学部、経営情報学部、薬学部を併設した総合大学になっている。このうち、今回御紹介する国際言語文化学部は、学際的な地域研究をめざして1982年に設立された学部で、「英米語欧米文化教室」、「イスパニア語中南米文化教室」、「中国語中国文化教室」、「インドネシア語東南アジア文化教室」という4つの地域研究コースに、総合的かつ理論的な国際理解を目標とした「国際文化教室」を加えた計5コースから成っている。学生数は1学年200名で、現在のところ男子学生が圧倒的多数を占めている。各学生は入学後、上記のいずれかのコースを自由に選択し(各教室ごとの定員は定めていない)、

そのコースの言語を第一外国語とし（「国際文化教室」の場合は4言語のうちいずれを選んでよい）、他にも1つの外国語を習得することを義務づけられている。このような言語の習得を前提とした上で、さらにその地域の、歴史、文化、政治、経済、日本との交流史等の課目を履修する。専任教官の数は36名（うち外国籍の者5名）で、その専門は、言語学、音声学、文学、歴史学、哲学、地理学、文化人類学、国際関係論など多方面にわたっている。（経済学、情報科学などは、経営情報学部専任教官が併任している。）そのうち本学会関連の教官はわずかに、「中国語中国文化教室」の許淑真助教授と、「国際文化教室」の倉沢愛子の2名だけである。この両名はいずれも東京大学の「国際関係論」分科の出身で、かつて衛藤瀋吉教授の指導を受けた者である。（もちろん許女史の方が大先輩である。）許女史は、日中関係史の専門家で、摂南大学では、「日中文化交流史」や「中国語」の他、「5・4運動」をテーマとする演習を担当しておられる。本年4月には、衛藤教授との共著、『鈴江言一：中国革命にかけた一日本人』を東大出版会から出版しておられる。一方、倉沢は、日本＝インドネシア関係、とりわけ第2次大戦期の日本軍政の研究を専門とし、摂南大学では、「国際政治史」「国際関係論」「インドネシア語」の他、「日本＝東南アジア関係」をテーマとする演習を担当している。ところで、本学部の一つの特色は、アジア研究の比重がかなり大きいという点であろう。教官数からみると、「中国」「東南アジア」の2教室の全教官の他に、「国際文化教室」の教官の中にも、その専門地域をアジアにしている者が3名いる。しかし残念ながら、教官数の割に、学生の間ではまだまだ欧米指向が強いようで、アジアを専攻する者の数は非常に少ない、というのが現状である。

外国人会員の発言

ディヴィッド・ウェッセルズ

私が日本国際政治学会に係わってきた経験から思うことは、会員のみならず日本全体にとって本学会の持つ意味の重要性である。日本の対外関係があるひとつの具体的、知的パイプを通して成り立つ時はとうに過ぎた。今日長崎の路面電車に乗っても、出島が長崎で、九州で、あるいは日本の中で孤立した島であるとはもはや誰も思わないであろう。同様に、日本国際政治学会も、現代国際社会の問題に関心を持つ数多くの日本の学会、学術組織のひとつであり、日本の学術環境、ひいては世界の知的、政治的潮流というより広範な状況と無縁には存在し

えない。私は、日本が不可解な程ユニークな国であるとは思わない。その理解の促進のために本学会の果たせる役割は確かに大きい。しかし、本学会が日本と世界を結ぶ唯一の知的橋渡し役になれる、あるいはなるべきだとも思わない。

以上のことをふまえたうえで、学会会員相互間で、また日本及び世界というより広い社会において、国際理解を促進してきた本学会の積極的貢献についていくつか述べてみたい。まず、学会を場とした学際的アプローチ促進に関する前向きな努力を指摘できよう。それは、各会員の専門分野間でも、また、パネリストとして非会員を迎えるその公開性という点においてもみられる。

日本国際政治学会は、また、研究大会への外国人の参加、あるいは世界の姉妹学会との交流を通しての実質的意見の交換を奨励している。この海外との交流に関しては、学会誌論文の英文要約の質を保ち、日本の研究者による国際政治研究への相次ぐ貢献が他の諸国の研究者の目に触れるようにしておくことも肝要であろう。国際政治に関する日本語による研究出版物の英文要約の学会誌への掲載も考慮されてよいかもしれない。

林 哲

本学会に対して何の貢献もなかった在日朝鮮人の一人である小生に外国人会員としての発言の機会を与えて頂き深く感謝したい。本学会の場合、国際政治という学問の対象や方法それ自身の性格も手伝って「国際化」といわれる昨今の潮流をある意味では先導してきた面も強く、あらゆる外国人にも開かれた学会としてその実績、歴史を誇っており、外国人研究者との交流も一層広く行なわれつつあるといえる。その国際的な交流を一層進めるために、在日の諸民族及び日本周辺の諸地域の研究者との交流が進められればというのが小生などの願望である。最近、本学会の会員の先輩諸氏がその著書や論文を通じて指摘されているように近・現代日本の歩みに即した国際認識、或いは具体的な日本の現実から出発する国際認識を如何にして深めるかという問題は重要な点であろう。そのような意味で、最近のエスニシティ論なども含めて、在日外国人の9割近くを占める在日朝鮮・韓国人が抱える諸問題や在日諸民族と日本人との交流等も日本の国際政治研究の重要な対象として意識され深められてほしいと願うのは何も狭量なナショナリズムからではない。今日の日本にあって、朝鮮・韓国人を含めたアジア人達がどのような生活をしているのか知られていないことが余りに

多いからである。さらに視点を周辺地域例えば朝鮮半島に広げると事柄は常に政治的な性格を帯び勝ちでアカデミックな議論にはなりにくいといった面は強いが、であればこそ本学会を通じての学問・研究の交流によって現実の政治課題の解決を展望しつつ貢献しうる面もまた少なくないとは言えないであろうか。余り無責任なことは論外として、本学会を通じて南北朝鮮、在日及び日本を含めた諸外国の研究者の交流が朝鮮半島の問題のみならず、日本と周辺諸地域の諸民族の相互理解による親近感や友情を深め、それに支えられた東アジア地域の平和の建設が進められることを願うのは浅学な小生一人のみではあるまい。

グレン・フック

私は過去5年の間に、年一度か二度大会に出席し、ニューズレターや機関誌に目を通し、また最近は多少学会の手伝いをさせていただいている「学国人会員」である。この5年間を振り返ると学会の運営など、非常に良くなっていると思うが、より一層の学会発展のために次のことを提案させていただきたい。(1)大会における司会者の役割。司会者は碩学であるからこそ単に進行係ではなく、大会のコオディネーターとしても勤めていただきたい。共通テーマを選んだ理由、そのテーマの国際政治学理論枠組の中における設定、報告者の詳しい紹介(その人の研究成果や関心、テーマとの関係など)、討論を促進するためのまとめなどを司会者の役割として考えてはどうか。特に若い会員や新会員にとって司会者の役割は重要である。(2)報告者。私が考える学会における報告者の役割は、新しい研究成果を世に送る前に専門家である会員に批評してもらうことである。また、敢えて言えば新しい研究成果であるか否かは別として、ある分野の専門家と他の分野の専門家との間の交流の場としての意味もあろう。特に新しい研究の報告の方に力を入れていただきたい。(3)討論者。報告者の研究発展のために核心をついた質問やコメントをすべきであり、また報告者もそれに要領よく答えていただきたい。(4)一般参加者。報告に対してもっと積極的に意見を述べるのが望ましい。(5)大会一般。報告者や討論者は与えられた時間内で話しを終え討論の時間を増し、特に研究部会や分科会においては、質問用紙を配らずに積極的に議論を進めていただきたい。また国際政治学者を幅広く育成するための場として、学会における報告者や討論者の選出回数を明確にし、裾野を広げること。(6)学会の民主化をはかるため、理事の再選は二、三回を限度とし、また若い理事を増すために地域だけではなく、各年代別に理事を選出してはどうか。会員の意見を反映するためにオンブズマン制度

を設ければ一般会員の意見の反映される学会となろう。僭越ながら私の思いつくままに意見を述べたが、学会の増々の発展を願う。

編集後記

本号では少し趣向を変えて、外国会員の発言を掲載した。なお、次号から中嶋嶺雄会員に、ニューズレターの編集のバトンをお渡しすることになった。斬新で充実した紙面が期待できると思う。前号でも述べたように、会員の皆様の温い御協力に対して編集委員一同、深く御礼を申し上げたい。また、編集実務という骨の折れる仕事を献身的に支えてくれた神戸大学の北川美佐子助手に感謝の言葉を記しておきたい。(文責 木戸)

木戸 蓊・木村修三・初瀬龍平

1985年1月10日発行
日本国際政治学会
ニューズレター委員会
657 神戸市灘区六甲台町2
神戸大学法学部
木戸 蓊研究室内
発行人 川 田 侃
編集人 木 戸 蓊
印刷所 一(はじめ)印刷